

主張, 表明, 沈黙, 不可知 — 宗教の可能性と倫理学との関係について —

ラインハルト・ヘッセ*著 船尾 日出志**訳

*フライブルク教育大学

**社会科教育講座 (哲学)

Behaupten, Bekunden, Schweigen, Nichtwissenkönnen. — Über die Möglichkeit von Religion und ihr Verhältnis zur Ethik —

Reinhard Hesse* and Hideshi FUNAO**

*Freiburg University of Education, Kunzenweg 21, 79117 Freiburg, Germany

**Department of Social Studies, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

訳者による前書き— 解題にかえて

ここで紹介するのはラインハルト・ヘッセ先生の最新論文である。2013年3月下旬に訳者がドイツを訪れた際に、ほぼ1週間、ずっとご一緒して、さまざまな対話をする事ができた。その際、ヘッセ先生から、同年2月にイランで行われた国際的哲学関係の学会で発表

ヘッセ先生：ドイツ、エルレンバッハのレストラン前にて
(2013年3月22日)



なさったこともお聞きした。テーマは「宗教」であるとのこと。すでに『哲学の根本問題』を翻訳出版した際に、ヘッセ先生の宗教観に興味を持ち、共感していたゆえに、ぜひ詳しく知りたいとお願いした。訳者が帰国して、間もなく原稿がメールにて届けられた。

学会での発表内容だけでなく、発表に際して寄せられた質問への解答もまた含む原稿であった。以上の経緯から、ヘッセ先生の同意のもとで、訳出し、紹介する。ハイデガーへの批判的見解は、我が国の哲学界では、あまり聞かれないものである。

ラインハルト・ヘッセの最新論文「主張, 表明, 沈黙, 不可知」の翻訳

「宗教」という言葉はラテン語では、「結びつける」という意味の“religiere”と同じ語幹をもっている。そ

して伝統的な、厳格な意味においては「彼岸との結合」を考えている。彼岸、彼岸の創造神への指摘によって、宗教は厳格な意味において次の3つの実存的な問いに解答している。すなわち、(非生命的)世界の起源に関する問い(そもそも何かが存在し、そして何もないのではないのは、なぜか)、(生物的)生命の起源に関する問い、そして(もはや単なる自然ではなく)自由を可能とする人間の精神の起源に関する問いに。彼岸への指摘によって、宗教は言葉の厳格な意味において、それと軌を一にして「絶対的、永遠の」真理(の起源)に関する、そしてそれとともにレーベンの意味、すなわち換言するならば、倫理の基礎に関する問いに解答している。

もちろん、「宗教」という中身無き言葉は、彼岸に関係しないさまざまな内容によって満たされ、そしてそれはおよそ次のことを意味しえよう。すなわち愛、連帯性、正義、レーベンの尊重等の起源である。プロテスタントのいくつかの部分ではそうであるように思える。しかしそれによって、わたしの考えでは、伝統的な宗教的要求の堅いコアが放棄され、そして宗教がある種の低次の、むしろ異名の倫理学になってしまっている。その倫理学は、過去の真理信仰の照り返しの時間をさらになお弱らせることができることを望んでいる。しかし、そのことはここでは考察外におかれる。

真剣に考慮されるべきであり、強力な要求を主張する宗教のコアは彼岸の表象である。すなわち、わたしたちが生きている「此の」世とならんで、「彼岸」が存在しているという表象である。まさに「彼岸」と言われるのは、それが人間の感覚と理性に依拠する認識可能性を越えたところにあるからである。(しかし彼岸は必要ならば「明らかに成りうる」ものなのである)。

そのような宗教の超越論的要求は言葉では2重の仕方
で擁護され、そして歴史的にみても2重の仕方
で擁護されている。すなわち1) 主張的な、妥当性を求める
演説(狭義の神学における)、および2) 表明的な、
主観的な視点、もっと正確に言うならばメンタルな状
態を述べる演説(神秘主義における)である。

証明的神学のコアとなる言明は「わたしたちが認識
できない何かが存在する」である。

わたしたちが「何か」を認識できないとき、わたした
ちはまた、それが「存在する」と言うことができな
いゆえに、上の命題は「存在しない何かが存在する」
というのと同義である。「A」と「非A」が同時に主張
されているのである。超越論的要求の主張的擁護はそれ
ゆえ、矛盾があってはならないという戒において直接
的に挫折している。

「宗教が自身を(主張しつつ)弁護し始めるとき、す
でに敗北している」(ヘーゲル)。

3つの実存の問題に、わたしたちは実際にはいかな
る解答も持たず、そしていかなる解答も持つことが
できず、いずれにせよ間主観的妥当性を要求する意味
においては持つことはできない。わたしたちは解答を
持つことはできない。というのは、わたしたちが探究
したいもの(世界、自然、理性)を、わたしたちの探究
のなかでまさに常にすでに所与のものとして前提とせ
ざるをえないからである。なるほど、わたしたちは
それが(世界、自然、理性)何であるかと問うことは
できる。しかしそれはどこから来ているのかと、い
ずれにせよその際に超越哲学的(解釈学的)循環にお
ちいることなく、問うことはできない。

Igoramus, Ignorabimus¹⁾

あるいは古代中国の哲学者である荀子が語ったよ
うに、「いかなる干渉もないのに完成し、そしていかな
る努力もないのに目標に達するものは、天の領域とい
われる。事物がそのようなゆえに、知性ある人間は
そのことについて思索すべきではない。……作業中
は何もみられない、結果だけがみられる。——そして
不思議と呼ばれるのであろう。それは称される……」
天であると。「……賢者だけが、天を認識したいとい
う欲求をもたない」(フーベルト・シュライヘルト/
ハイナー・レッツ編著『古典的中国哲学』クロス
スターマン出版社、2009年1月、第VI部第14章、
271頁より引用)。

わたしたちに残されているのは驚き、不思議への
驚きである。驚いて問うことは、哲学の出発点である。
わたしたちは「不思議」について何も知ることは
できない。——そしてより謙虚であり、すなわちわた
したちの限界を意識すればするほど、わたしたちは
驚かざるをえない。

もちろん謙虚な、わたしたちが知りえないとい
うことを知る(不可知的)驚きのなかで、同時に非言
語的

な、主観的な気分の意味における宗教が生じると
した場合、そのことに対しては一言も発することは
できない。というのはその宗教自身はまったく何
も語らないからである。宗教は、5世紀のシリア
の神学者であったディオニシウス・アレオパギタ
が欲するように、名状しがたいものについてせい
ぜい「歌う」ことができるか、あるいは哲学者で
あると誤解されている神秘的詩人、ハイデガー
がおこなったように、名状しがたいものを、詩
的イメージおよび暗示的概念のなかで表現しよう
とすることができるだけである。そのことにつ
いては下記を参照のこと。

それでは宗教、つまり「彼岸」との関係は可能
なのか。可能だ。次の2つの仕方である。

哲学的に、つまり単なる理性の限界内で、知る
ことができないことについての知識として。それは、
わたしたちにとって謙虚な驚きのためのきっかけ
である。

非哲学的に、主観的な有り様として、さまざま
な神秘家によって描写されている全一性、すなわ
ち時空における無差異性の感情として、そしてそ
の点で、名称をもつ、さまざまな差異性から成り
立つ世界に対して、名前の無いまったくの他者
への所属性の感情として。その主観的・宗教的
感情の内容は、その感情をもっている人によって、
主観的・宗教的感情として表明的弁舌のなか
で(詩的に)叙述される。

まさにそのことを神秘家たちは試みている。

ディオニシウス・アレオパギタ(紀元500年頃):
「神の名によって」:1. :「わたしたちの指導原理
は、……わたしたちが真理を……人間的知性の
説得力によって……証明しようと欲せず、……
(かえって)言葉なしに、そして思考なしに……
、わたしたちの理性的かつ概念思考のすべての
力とすべての活動を超越し、(そしてわたした
ちを、著者挿入)言葉では言い表せず、概念
では思考できないものと結びつける統合のなか
で証明しようと欲するということである。……
というものは悟性と知性を越える超越実体性
に関する知と無知——それはまさしく実に超
越実体的認識である」。6:「それは真に、す
べての名前を超越し、かつ無名であり、この
世界あるいは未来の世界において名づけられる
すべての名前を超越する不可思議な名前では
ないのか」。8:「それゆえあなたは、愛する
ティモテオスよ、神的なものを捧げられた
ものに、伝えかつ委ねてはならない!しかし
わたしに神は……その名づけられない、か
つ無名のな神性の多名性を歌に詠ませる……」。

マイスター・エックハルト(1260-1328):
「精神における貧困な者は天の至福にあずかる」。
説教32:

「そのような貧困のなかにいる人間は、なに
ひとつとして……知識がないにちがいない。
……かれはかれのなかで生きている認識を
なにひとつ持っていないにちがいない。……
ところで精神が貧困であるはずの者は、自
身の知識についても貧困であるにちがいない、

したがって神についても、被造物についても、自分自身についても何も知らない。……人間が(なお)(自身のなかに)場所を保持しているところでは、その人間はなお差異性を維持している。……というのはわたしの本質的な存在は、わたしたちが神を被造物の発端であると把握するかぎり、神の上方に、すなわち神があらゆる存在とあらゆる差異性を超越するあの神の存在のなかに、あるから。……まさにここでは神は精神と一つであり、そしてそのことはみつけることができるもっとも本来的な貧困である」。

あるいは、ハイデガーは、かれは理性と概念の歴史の全体を誤謬の発展として、すなわち本来的なもの、差異のないもの、そしてしたがって言葉で表現できないものから遊離した発展として、世界の剥き出しの「フレーム」の非本来的なもの、真理でないものへと貶めようとするかれの大々的に構想された試みのなかで、さまざまな言葉を(まったくもって、かれ自身の言葉もまた)もはやそのようなものであるとは、区別としてのその価値を的確にとらえつつも、承認せず、単なる「形式的表示」であるとみなすところまで進んでいる。

しかし神秘主義的感情が、さまざまな相違から成り立つ此岸から徹底的に区別されるもの、完全に別のものを主張するとき、それは(区別の)原理を用いているのである。それでいてまさしく区別を克服していると申し立てているのである。

その超越論的实践主義的の矛盾は次のようにしてのみ回避されうる。沈黙によって、すなわち知らせることのない主体への自己限定によって。事実、ハイデガーは山小屋の前の椅子に座り、沈黙し、そして沈黙しつつ、「存在が明るく」なり、そしてそのようにしてかれは真の本来的なものを得ることを希望する。

しかし、言葉によらないとしたら、いったいどのようにして、わたしたちは、そのことについて、つまりその希望について知ることができるのか。ハイデガーはさまざまな言葉で、その希望をわたしたちに以前、繰り返し新たに、かつおおいに弁じ、書いてくれたのに。

それゆえ、そのレベルでもまた矛盾は論理的矛盾でなく、パフォーマンス的な矛盾である。「わたしは、真理は述べることなし(言葉なし)でしか発見されえないということを、真理であると述べる」。

しかし沈黙によって何を述べることができるのか。そこで沈黙されていることについて、つまり沈黙の「内容」は何なのかを、どのようにしてわたしたちは知ることができるのか。

もちろん沈黙の「内容」であると思われるのは、「真理」である。しかしどのような種類の真理が、沈黙することしかできないのか。いずれにせよ、わたしたちの欲求を充足させること、葛藤を解決すること、戦

争を回避すること、生態学的・軍事戦略的リスクを軽減させること等々のような、「此岸で」わたしたちの生活をうまくこなすために使用する真理ではない。すなわちそのような此岸の真理は、いずれもが、語られ、かつ論証されるにちがいない。

非言語的な存在形式における、つまり主観的な、外部から知覚できず、そして内的に伝えられない様態にある宗教は「此岸の」諸問題の解決のために(それとともに倫理学のために)役に立たない。宗教はそのようなことと一切関係ないのだ。(そして「彼岸」についてもまた宗教は何も言うことはできない)。

啓蒙運動はそのことを、宗教は私的要件であると言うことによって、前言語哲学的に定式化した。

まとめよう。

①「わたしは存在しない何かが存在するということが、そしてそれこそが本来的真理の場であるということ、真理であると主張する」という宗教の中心命題が、強力な意味において表明であると理解されているとき、その命題は意味をなさない。というのは、それは「A」を述べるとともに「非A」を述べ、そしてしたがって、その命題に妥当であると同意することを期待されている者は、その同意が何についてのものかを知ることができないからである。

② 宗教の中心命題が妥当要求なしに、「わたしは、存在しない何かが存在し、そしてそこに本来的真理があるという心的表象を持っている」というように心的表象(様態)の表明として述べられるとき、同意ないし拒絶は余分なこととなる。かくして、宗教的表明が超越論的实践主義的自己矛盾なしに可能ではないということ指摘することも本来的に余分なことである。というのは、非実存を真理の源泉であると表明する者は必然的に自分自身の実存を真理であると前提せざるをえないからである。さもなければ、その者は何も表明できないだろうから。わたしは表明する、ゆえに Ergo sum 《我あり》。

③ 宗教的真理を言語的に、主張のないし表明的に表現することの不可能性から、神秘主義者は沈黙というラディカルな結論を引き出した。ただしそれは、何について沈黙されているのか言われていない限りは、内容的に規定されないままである。しかしそれが言われるとき、沈黙のオプションは根拠がなくなる。(Si tacuisses) 《静かにしていたなら》。

最後に残るのは、知ることができないことを知ること、および類的存在としての自分たち自身しか頼れない、自立的で、導かれず、守り隠されることのない人間の謙虚な驚きである。

そのようにみると、知ることができないことを知ることに関する知識は「彼岸」にたいする是認できる自己行動の意味における宗教の啓蒙運動的形態である。

わたしたちは次のことを認識しなければならない。すなわち、わたしたちは導かれておらず、わたしたちは自助しなければならず、その際、わたしたちは互いに支えあい、わたしたちはその点で平等である。

真理と倫理の源泉は「彼岸」の知識としての宗教ではない。

真理と倫理の源泉は知ることができないことに関する知識の、そして同時に自分たち自身しか頼れないことに関する知識の意味における宗教である。

その場合、「宗教」ということで、もはや「彼岸」との結合は考えられていない。逆に他者との、すべての他者との結合が考えられているのである。わたしたちをこの「宗教的」意味において結びつけるのは、わたしたちの認識の限界への、その限界を克服しようとする努力の無意味さへの洞察であり、そしてそこから生じる次のような洞察である。つまり、理性を備えた類的存在としての完全に自立した自己定位にわたしたちが頼っているという洞察である。Il faut faire avec ce qu' on a.²⁾

わたしのテキストへのA.G. Maturanoによるコメントにたいする簡単な論評

Maturanoはわたしの批判的な前提的立場に共感している。しかし超越概念は（原理的な「知ることの不可能性」の承認を越えて）維持することを欲している。かれは書いている。“En ese ‘encontrarnos remetidos’ lo transcendente se liga con el sujeto y la religion muestra su efectividad ética.”³⁾

しかしここで — 原理的な「知ることの不可能性」を根底におきつつ — “lo transcendente”《超越的なもの》によって何を思うことができるのか。

どういう点において、“lo transcendente”が存在することの“indicios”《証拠》が存在するのか。

“racionalidad de la transcendente”《超越的なものの合理性》が存在し、そしてしかも“racionalidad de la pregunta”《問いの合理性》の意味において存在すると、Maturanoは書いている。どのような問いなのか、どのような種類の問いなのか。“racionalidad”《合理性》によって何か証明可能なことが思われ、そして“lo transcendente”によって証明不可能なことが思われているとき、次のような古くからの問いが提示される。すなわち、原理的に証明不可能なことを、どのようにして証明することができるのか。

わたしは次のように考える。わたしたち人間にとって原理的に認識できないこと（わたしたちの認識能力を超越する何か）が存在していると思うならば、per definitionem（定義によって）、続けてそれに関連して何かを認識し、そして語りたいと欲しようとする試みは無駄なことである、と。たとえ主張的弁舌であろう

と、表明的弁舌であろうと、状況証拠によってであろうと、問いによってであろうと、神秘主義者たちの雄弁な沈黙によってであろうと、あるいはとにかく何であれ。いずれの場合も、わたしたちは自己矛盾のなかで苦悩する。認識できないものについて何かを認識する（それはもちろん可能ではない。というのはその場合、それはまさにもはや認識できないものではないのだから）度合いで、わたしたちは認識できるものの領域のなかで、すなわちいわば此の世で動いているからである。ただしそれによって、「言葉の強い意味における宗教」はその本来的な中核関心事を奪われることになる。

超越実践主義的認識論と倫理学的根拠付けのポイントは、まさにそれが、人間が（類的本質としての）自分自身に頼っているという事実を承認し、そして例えば真剣に問うことができる可能性の条件に関する反省のなかで、人々の外に存在する何らかの審級への遡及なしに、繋がる人間の基本原則を示すということである。今なお装いを新たにされ、そのようにしていつそう穏和とされる超越性も、そこには生じない。

そのような超越性が生じるとき、それは倫理学の、より厳密に言えば、真理発見を目標とする同等の者たちのなかでの倫理的討議の終焉であろう。そしてそれは他者を打ちのめすという目標をもつ、いわゆる宗教間ないし世界観間の闘争の始まりであろう。

わたしのテキストへのJ. De Zansによるコメントにたいする簡単な論評

わたしの小さな論説は、超越性概念ないし宗教概念の批判的文化史を提起するような大胆な意図をもってはいるわけではない。

わたしが話題にしているのは、わたしたちの文化圏において、わたしの考えではいまなお広く普及している、「彼岸」のような何かが存在する、そしてそれは真理の場所であるという見解のうち、何が保持されるべきかという問いでしかない。その際、「彼岸」を、わたしは、原理的にわたしたちの認識の届かないことであると理解している（J. De Zansが想定しているような、現時点でまだ知られていないことではない）。

彼岸についてのさまざまな表象が、その都度、歴史的に見出しうる「道徳性」に大きな実際的影響を与えているということを、わたしは常識的に疑わない。しかし、そのことはわたしの論説の系統的な疑問設定（そのような「彼岸」が存在するのかどうか）に何の関係もない。

さらに、わたしは人権の普遍主義はキリスト教に起源があるというJ. De Zansの意見とは違っている。人権は逆に、宗教にたいする、ここではカトリック教会にたいしてなのだが、過酷な闘争のなかで勝ちとられ

たに違いない。そして普遍主義の思想はキリスト教起源ではない。それは古代ギリシャの哲学的啓蒙に由来しているのである。

J. De Zansは書いている。“el hombre religioso…… parte de un saber que le transmite su fé”《敬虔な人間は……一部の知識がその人の誠実性を伝える》。それには確かに同意してよいだろう。しかし、知識がいったい本当に信仰に根ざすものなのかどうか、という基本的問いへの解答に際しては役立たない。

“Hesse se revela (en el ultimo párrafo), a pesar suyo, como espíritu abierto a lo religioso”《ヘッセ自身は(最後の段落において), 自己の苦悩に際し, どのようにして敬虔なものに精神が開かれるのかを明らかにしている》。ここではJ. De Zansは, 主張的神学的弁舌と神秘主義的な表明(ないし沈黙)の間の逃げ道として, わたしが提案した宗教概念が, 完全に非超越化され, そして繋がる人間に頼ること(「超越的なものを原理的に知ることができないことへの洞察を鑑みて」)以上の何も意味していないことをみていない。

訳註

- 1) 知らない, 知ることはない。(ラテン語)
- 2) 持っているもので行いなさい。(フランス語)
- 3) 「連帯や宗教が委託する超越的なものは倫理の有効性を示す」という趣旨(スペイン語)

※ なお文中の《 》内は船尾によるドイツ語以外のテキストの翻訳文である。そのようなドイツ語以外のテキスト翻訳に際し, 社会科教育講座の同僚, 吉田健太郎准教授の協力をえた。

(2013年9月27日受理)